

ペロポネソスにおけるスパルタのヘゲモニーの終焉：レウクトラ以降の政治過程

## 講義の概要

### ペロポネソス同盟解体の政治過程

- 前 371 レウクトラの戦い
- 前 370 アルカディア・エーリス・アルゴス・ボイオーティアの同盟  
エパメイノンダスの第一次ペロポネソス遠征（～前 369）  
アテーナイ、スパルタ支援
- 前 369 スパルタ・アテーナイ同盟締結  
アルカディア、リュコメデスのもとに独自路線追求
- 前 368 アリオバルザネスの平和への試み  
涙のない戦い
- 前 367 スーサでの平和会議  
テーバイの和平工作失敗  
エパメイノンダスの第二次ペロポネソス遠征→アカイア  
シキュオンのエウプロンのクーデタ
- 前 366 プレイウス攻防  
エウプロン殺害  
アテーナイのデモティオン、コリントス占領を提案  
コリントス他の同盟諸国、ボイオーティアと和平。

### 関係諸国の内部事情

#### スパルタ

市民人口の減少、住民構造、アゲーシラーオスとアンタルキダス

#### ペロポネソス同盟諸国

アルカディア諸都市、エーリス、アカイア諸都市、コリントス、プレイウス、シキュオン

#### アルゴス

スキュタリスモス

#### アテーナイ

カッリストラトスとイピクラテス

#### ボイオーティア

テーバイとオルコメノス、エパメイノンダスとメネクレイダス

## 結論

文献史料

D.S. 15. 51. 1- 76. 3.

Plut. *Ages.* 28- 33.

Idem, *Pelop.* 20-30.

Xen. *Hell.* 6. 4. 1- 7. 4. 11.

碑文資料

P. J. Rhodes and R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC.*, Oxford, 2003, nn.30-36.

M. N. Tod, *A Selection of Greek Historical Inscriptions*, Vol. II, Oxford, 1948, nn.130-137.

史料集

H. Bengtson, *Die Staatsverträge des Altertums II*, München/ Berlin, 1962, nn.269-285.

歴史的注釈

I. A. F. Bruce, *An Historical Commentary on the Hellenica Oxyrhynchia*, Cambridge, 1967.

D. R. Shipley, *A Commentary on Plutarch's Life of Agesilaos*, Oxford, 1997.

P. J. Stylianou, *A Historical Commentary on Diodorus Siculus Book 15*, Oxford, 1998.

研究史

J. Buckler, *The Theban Hegemony, 371-362 BC.*, Cambridge/ Massachusetts/ London.

P. Cartledge, *Agesilaos and the Crisis of Sparta*, Baltimore, 1987.

E. David, *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): Internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, Salem, 1986<sup>repr.</sup>.

A. Griffin, *Sikyon*, Oxford, 1982.

R. P. Legon, *Megara: The Political History of a Greek City-State to 336 B.C.*, Ithaca/ London, 1981.

J. Roy, "Arcadia and Boeotia in Peloponnesian Affairs, 370-362 B.C.", *Hist.* 20(1971), 569-599.

J. B. Salmon, *Wealthy Corinth: A History of the City to 338 B.C.*, Oxford, 1984.

C. J. Tuplin, *The Failings of Empire*, *Hist. Einzel-schriften* 76, Stuttgart, 1993.

中井義明、「帝国の終焉 —スパルタ帝国解体の最終プロセス— (一) ～ (三)」、『社会科学』、72～73 ; 77号、2004 ; 2006年。

## 大学院講義ノート

### ペロポネソスにおけるスパルタのヘゲモニーの終焉：レウクトラ以降の政治過程

はじめに

本講は前三七一年にレウクトラにおいて歴史的な大敗北を喫したスパルタがギリシア世界における帝国支配の重要な装置として利用してきた所謂ペロポネソス同盟の解体の過程を追っていくことを目的としている。ペロポネソス同盟の崩壊はレウクトラの戦いの後アテーナイで開催された平和会議におけるエーリスに始まり、続くマンティネイアを中心とするアルカディア諸都市の離脱とアルカディア連合の結成、最終的には前三六六年のコリントスを中心とするイストモス諸国の離脱によって前六世紀以来ギリシアの政治史に大きな影響を及ぼしてきたペロポネソス同盟は解体してしまった。

その背景にはテーバイを中心とするボイオーティア同盟軍の相次ぐペロポネソス侵攻、エーリス、アルカディア、アルゴスによる反スパルタ同盟の結成と親スパルタ諸国への圧力、それぞれの国内で展開される寡頭派と民主派の権力抗争、などの様々な要因が絡んでいた。

#### 一 研究史

タプランはレウクトラの結果スパルタが弱体化し攻撃的な帝国主義政策の時代は終焉したと評価し<sup>1</sup>、三七一年以降のスパルタの軍事の実績は失敗をよく物語っているとする<sup>23</sup>。三七〇/六九年のアゲーシラーオスのアルカディア侵入は敵の領土の損害を与えることなくアゲーシラーオスが戦闘を避けたにすぎない<sup>4</sup>。アルカディア連合の敵を擁護することもなくラコニアへの直接攻撃を妨げることもなかった<sup>5</sup>。スパルタの防衛も侵入軍がエウロタスを渡河するのを阻止できなかった<sup>6</sup>。同盟国からの援軍はヘイロタイからスパルタ人を守る事であった<sup>7</sup>。アルキダーモスが負傷したクロムノスの敗戦<sup>8</sup>。プレイウスをめぐる攻防はスパルタではなく小さなポリスの目覚ましい軍事的な記録である<sup>9</sup>。しかしそれはスパルタの運が最低であったことを示している。スパルタは現有の、長年に亘る同盟諸国に対してすら *soteria* (安全保障) をもはや提供できないことを認めざるを得ず、結局同盟諸国はスパルタを見限ってしまったのである<sup>10</sup>。スパルタの全面的な指揮権を放棄したアルカディアとの同盟、アテーナイとの同盟はスパルタが落ちていった深みとスパルタがかつて保持していた *arche* (帝国) の完全な消滅を雄弁に物語っている<sup>11</sup>。

しかしタプランにはレウクトラで露呈されたスパルタの決定的な弱体化と同盟諸国がスパルタから離れていきペロポネソス同盟を完全に失ってしまうまでのタイムラグをどのように評価するのか。スパルタの無能力が広く認識されるにはそれだけの時間が必要だったということなのか。

バックラーはレウクトラの敗北のためにスパルタがもはやペロポネソスの寡頭派の権力を保証し得なくなってしまう、民主派はスパルタを恐れなくなってしまうと指摘し、デ

イオドロスの記述に従って数多くの都市で政治的混乱が生じたと言う<sup>12</sup>。その上で、度重なるエパミノンドス率いるボイオティア軍の侵入が残されていたスパルタの同盟国の防衛にスパルタが有効に寄与できなくなっていたこと、為に多くの同盟国が自ら自国防衛に専念せざるを得なくなり、同盟としての共同行動から脱落していき、もはや同盟諸国とスパルタとの間には本当の意味での利益共同体は存在しなくなってしまったと主張する<sup>13</sup>。そして前三六六年のアカイア進攻もスパルタから同盟諸国を奪い取ることが目的の一つであった<sup>14</sup>。それはナウパクトスなどのコリントス湾岸にある港を奪うことによってコリントスを孤立化させ、コリントス＝スパルタ同盟を破壊することにあつた<sup>15</sup>。

アテーナイの野心、アルゴスの脅威、テーバイの軍事的圧力、さらにはコリントス国内のティモパネスの僭主への画策にさらされていたコリントスはテーバイと休戦条約を結ぶことによって戦闘を放棄しようとしたのである<sup>16</sup>。コリントスはエピダウロスやプレイウスと語らってスパルタにテーバイとの休戦条約の承認を求めたのである。スパルタはもはや自分たちの同盟諸国を防衛できず、また懲らしめることもできず、これらの諸国の重要性を知っていたので、スパルタはコリントスやその同盟諸国が平和を締結するのを許可したのである<sup>17</sup>。エパミノンドスの目的の一部はこのようにして達成されたと評価する<sup>18</sup>。

しかし、エパミノンドスの現地寡頭派体制の存続を認めるという裁定がスパルタの同盟政策に及ぼした打撃の評価がバックラーには欠けている。シキュオンやペッレネ、アカイア、そして恐らくコリントスやプレイウスに対してエパミノンドスがスパルタから同盟国を剥ぎ取っていくために親スパルタ派・寡頭派政権の存続を認めたことがこれらペロポネソス北部諸国に及ぼした影響を正當に評価していないように思われる<sup>19</sup>。

これらの疑問についてカートレッジが答えを提供しているように見える。カートレッジはレウクトラの戦いが千人足らずの完全市民にまで減少していた人的資源の不足と連動してスパルタを破滅させた「一突き」であつたというアリストテレスの見解を引用する。しかしレウクトラの戦いによって作り出された将来性がスパルタと敵対していた諸国によって認識せられるのに一年以上を要したとし、その理由を心理的要因に求める。ギリシア人にとってほとんど二世紀もの間スパルタの力は国際関係において不変であつたので、スパルタがもはや無敵ではなく、新しい秩序がギリシア本土に作り出されたという考えが理解されるのに時間がかかった、と言うのである<sup>20</sup>。

もう一つはスパルタの同盟諸国の寡頭派指導者の間に広がる厭戦気分の存在である。カートレッジはエパミノンドスがアカイア諸国の内政に干渉しなかったことを賢明な処置であつたと評価する<sup>21</sup>。というのはスパルタの崩壊に瀕していたペロポネソス同盟諸国の寡頭派指導者たちは絶えざる戦争の経済的、その他のコストを避けるためにボイオーティアとの和解に既に傾いていたと指摘している。

しかしスパルタにその力がないということは既に前三六九年にスパルタがアテーナイとの同盟締結を求めた時、アテーナイも認識していたしスパルタの同盟諸国も周知していたのである。それは秘密でもなんでもなかつた。スパルタの力ではなくて、国内のスタシス

とアルカディアやアルゴスと敵対している民主派および亡命者とのつながりに対する警戒がこれらの諸国をスパルタに向けさせていたのである。とりわけレウクトラの後ペロポネソス各地で生じた内乱と革命は生き延びた寡頭派指導者たちを従来以上に警戒させたことも十分に理解できる。

さらに別な契機も見出される。コリントスもプレイウスもコリントス戦争中は民主派の手の中にあり、コリントス戦争後スパルタの手で民主政が倒され、寡頭派を政権の座につけさせたポリスであることに注目する必要がある。これらのポリスの寡頭派指導者はアルカディアやアルゴスと結び付く民主派や亡命者と厳しく対立していたのだ。だからこそボイオーティアに対して寡頭政の温存を条件に講和に応じているのである。

そのような同盟諸国の例をコリントスに見ることができる。サーモンは強国同士の争いに挟まれた小国の典型的な姿をコリントスに見ている<sup>22</sup>。前三六六年にスパルタとの同盟を脱してボイオーティアやその同盟諸国と平和条約を締結するまでコリントスは軍事においても外交においてもスパルタに大きく寄与しているが<sup>23</sup>、サーモンによればコリントスがスパルタに対して忠実な同盟国であり続けたのはもはや干渉する能力を全く持たないスパルタを取るのか、その意図ははっきりしないがその意図に強い懸念が抱かれるボイオーティアを取るのかという選択の問題であった<sup>24</sup>。そしてその背景には民主派革命と民衆に対するコリントス寡頭派の警戒の念があった<sup>25</sup>。

自分たちの存在と体制護持の為に弱体化したスパルタとの関係を継続せざるを得なかったと考えられる。スパルタの軍事力は弱体化してもスパルタがなお保持している国際社会の中での権威と影響力はこれら諸国の寡頭派にとって無視せざるを得ない重要な要素であった。スパルタを介してシケリアのディオニュシオスから傭兵を期待することができたし、ペルシアによる自由と自治の保障の声明を引き出すことが出来たし、アテーナイとの同盟によって強力な援助を期待することもできたのである。これらの要素を無視してはレウクトラ後の同盟諸国の動向を評価することはできない。

デーヴィッドはアルゴスの内乱に関するディオドロスの記述に基づき寡頭派と民主派の党争と同時に富裕者層と貧民大衆層との間の激しい階層対立があったと主張する<sup>26</sup>。しかし、アルゴスの事例を他のペロポネソス諸国に適用するのは問題があるように思われる。シキュオンにおけるエウプロンの僭主政への試みは前三六七～三六六年のことであって前三七一～三七〇年のことではない。マンティネイアやテゲアの事例はそのような階層対立を窺わせるような革命現象を示していない<sup>27</sup>。

## 二 前三七一年から前三七〇年にかけての事件と動向

前三七一年七月のレウクトラの戦いで大敗北を喫し、スパルタが一挙にギリシア本土における覇権を失ってから前三六六年にアカイアの諸都市を除くコリントスやプレイウスなどの同盟諸都市がボイオーティアなどとの講和を求めてスパルタの指導権から離れていくまでの時期に限って、ペロポネソス同盟諸都市の動向を概略する。

## 1. 前三七一年の事件と動向

レウクトラの戦いが終わり、生き残ったスパルタ軍指揮官たちは被った損失に当惑していた。その時、ペーライの僭主イアソンはスパルタ軍のポレマルコス（軍司令官）に休戦の仲介を申し出、同盟軍の中には敵と交渉しているものがあると指摘して決断を促したのである<sup>28</sup>。スパルタ側から休戦が申し入れられた。テーバイは戦死者の収容を許可し、敗れたスパルタ軍は同盟軍を率いてペロポネソスへと撤退していった<sup>29</sup>。

悲報はギュムノパイディア祭の最中スパルタ本国に伝えられた<sup>30</sup>。撤退してくる遠征軍を迎えるために二モラー編成の部隊がアゲーシラーオスの息子アルキダーモスの指揮下急遽イストモスの地峡部に派遣されている<sup>31</sup>。

これにはアルゴスを除くペロポネソスの全ての諸都市が部隊を提供したとクセノポンは記している<sup>32</sup>。クセノポンが特に強調しているのは「熱心にprothymos」とか「大胆にerromenos」と形容する同盟諸国のスパルタへの協力の姿勢である。親スパルタ派lakonizontesのスタシッポス派が有力であったテゲアや貴族政下に在ったマンティネイア、コリントス、シキュオン、プレイウス、アカイアやその他の地域の諸都市が部隊派遣に協力したと伝えられている。

レウクトラ直後から各国の動きは慌しくなる。先ずレウクトラで歴史的な大勝利を得たテーバイは戦勝を知らせる使節をアテーナイに派遣している<sup>33</sup>。それは戦果を拡大するためにペロポネソスへの共同遠征を提案するためでもあった。しかし、アテーナイのテーバイに対する態度は冷淡であり、テーバイ側の要請に対してアテーナイは回答を避けている。テーバイに対する不信感とその急速な勢力の拡大への警戒心があると思われる。むしろアテーナイは現状の固定化を目指すことになる。

一一月になってアテーナイは平和のための会議を提唱している<sup>34</sup>。ペロポネソス諸国がスパルタとの同盟を堅持するだろうという判断が根拠となっていた<sup>35</sup>。ポーキスのヒュアンポリスとヘーラクレイアを破壊していたペーライのイアソンの動きも懸念材料の一つであったろう<sup>36</sup>。現状の固定化を企てるアテーナイの意図は、「もし何人かが以上の誓いを為した国に対して兵を進める時には、私は全力を持ってその国を支援するであろう」という平和条約の条項によく示されている<sup>37</sup>。エーリスは誓約を拒否し、平和条約に参加しなかったのである<sup>38</sup>。

## 2. 前三七〇年の動き

前三七〇年の事件は大きくは三つの段階に分けることができる。第一段階は中部ギリシアにおけるテーバイやイアソンらによる平定の動きである。これらはこの年の春を中心とした事件であった。第二段階はアルカディアにおけるマンティネイアを中心とするアルカディア連合の結成と拡大への動きである。これは主として夏に生じた事件の局面であったと位置付けられる。そして第三段階がエパメイノンダス率いるボイオーティア軍のペロポ

ネソス進攻であり、ボイオーティア軍やアルカディア連合軍などのスパルタ攻撃において頂点に達する。この第三段階は前三七〇年の暮れのことと考えられる。

以下、前三七〇年の諸事件を春、夏そして冬の三つの時点に分けてそれぞれの事件の経過を概観してみよう。

#### (1) 前三七〇年春：中部ギリシアにおける新しい事態

年が改まり、春が訪れると共にテーバイとイアソンはそれぞれ積極的な活動を開始し始めた<sup>39</sup>。その対象とされたのはスパルタと同盟関係にあるか、あるいは中立の立場を堅持していた中部ギリシアの諸都市であった。これらはいわば権力の空白地域を形成していた。これまでこれらの諸都市の後ろ盾となっていたスパルタの存在は消え失せていた。

当初テーバイはスパルタに協力した諸都市に対する報復を計画していた<sup>40</sup>。その計画を放棄させたのはレウクトラの立役者だったエパメイノンダスである。エパメイノンダスはこれまでテーバイに対して敵対的な態度を取ってきた諸都市に報復するのではなく、テーバイと同盟させてテーバイの指導権下に組み込むよう説得したのである。その結果、ボイティアでは唯一ボイティア連盟に加わっていなかったオルコメノスがテーバイの指導に服することとなり、ポーキス、アイトリア、ロクリスなどの中部ギリシアの諸地域がテーバイと同盟を結んだ<sup>41</sup>。

このテーバイと競争するかのようにスパルタの影が消えたあとの中部ギリシアに勢力の拡大を積極的に行なったのがペーライの僭主イアソンであった。イアソンはオプスのロクリスとヘーラクレイアを手に収めた<sup>42</sup>。前の年に城壁を解体されていたヘーラクレイアはイアソンの攻撃に激しく抵抗したが、結局内通者を出し、陥落してしまった。そのヘーラクレイアの領土をイアソンはオイタイア人とマリス人に分け与えている。

中部ギリシアはスパルタにとって事実上失われていたのでそれほど大きな打撃とはならなかったが、アルカディアの動きはスパルタに深刻な問題を引き起こすことになる。

#### (2) 前三七〇年夏：マンティネイアの政変とアルカディア連合の結成

前三七〇年の夏マンティネイアで政権交代が起き、これまで政権の座にあった貴族派に替わって民主派が権力を掌中に納めたのである<sup>43</sup>。彼らは民主政を復活させ、民会を召集しマンティネイア市の再建を決議させた。この動きに不安を抱いたスパルタはアゲーシラーオス王を派遣したのである<sup>44</sup>。

マンティネイア当局者たち *hoi archontes* は民会を招集しようとはせず、自分たちに用件を話すように命じた。アゲーシラーオスは「スパルタ側の意向に従って *meta tes Lakedaimonos gnomes*」市壁を建設するようにマンティネイア側に要請している<sup>45</sup>。マンティネイア当局者たちは、国家全体によって決議されたという理由で、スパルタの要求を拒否したのである<sup>46</sup>。当局者たちの冷淡な態度にアゲーシラーオスは「怒って *orgizomenos*」帰国してしまった。

マンティネイアの動きはアルカディアや周辺の他都市の同調を得ていたようである。というのは、いくつかのアルカディア諸都市ton Arkadikon poleon tinesがマンティネイアに作業要員を派遣しているからである<sup>47</sup>。さらにエーリスは三タラントンの資金をマンティネイアに提供している。

マンティネイアと歴史的に対立していたテゲアはマンティネイアと違った動きをする。テゲアにおいては寡頭派が優勢であった。アルカディア連合への加入を主張する民主派と現状維持と祖法の堅持を主張する寡頭派は鋭く対立していた<sup>48</sup>。テゲアにおける最高の決議機関である聖使会議thearoiにおいて寡頭派は民主派の提案を拒否したのである<sup>49</sup>。

民主派は蜂起を企て<sup>50</sup>、マンティネイアに支援を要請している<sup>51</sup>。民主派の不穏な動きを察知した寡頭派は逆に集結中の民主派に対して奇襲攻撃を仕掛け、民主派の指導者プロクセノスと若干の支持者が戦死し、残りの民主派はマンティネイアへ通じる市門まで逃げ延びた<sup>52</sup>。奇襲に成功した寡頭派は交渉による事態の收拾を求め、民主派も援軍がマンティネイアから到着するまで時間を稼ごうとしたのである<sup>53</sup>。両者が交渉している最中にマンティネイアから援軍が到着し、寡頭派はパッランティオンへの逃走を余儀なくされた<sup>54</sup>。

民主派とマンティネイアからの援軍は追跡し、アルテミスの神殿に閉じこもっていた寡頭派を攻撃したのである<sup>55</sup>。寡頭派は降伏し、テゲアに連れ戻された。民主派はマンティネイア人と合同の法廷を開き、捉えた寡頭派を裁いた上で処刑している<sup>56</sup>。その間にクセノポンによれば八〇〇名、ディオドロスによれば一四〇〇名の寡頭派がスパルタに亡命している<sup>57</sup>。亡命者たちはスパルタに支援を要請したのである<sup>58</sup>。

スパルタが亡命者への援助を決定した頃、アルカディア人はアセアに兵を集結させていた<sup>59</sup>。アゲーシラーオスはアルカディアに侵入し、エウタイアを占領した<sup>60</sup>。スパルタ軍がエウタイアに滞在している間、マンティネイア人はオルコメノスに遠征している<sup>61</sup>。オルコメノス人はポリュトロポス揮下の傭兵隊や恐らくプレイウスの騎兵部隊と共にマンティネイア人を撃退したのである。

エウタイアのアゲーシラーオスの許にヘライア人やレブレオン人<sup>62</sup>、ポリュトロポスの傭兵隊やプレイウスの騎兵部隊が合流している<sup>63</sup>。さらにアゲーシラーオスの軍にはテゲア人亡命者<sup>64</sup>、アルゴス人<sup>65</sup>やボイティア人亡命者が参加していた。アゲーシラーオスはマンティネイアに侵入し<sup>66</sup>、マンティネイア人にはアルゴスからの援軍やその他のアルカディア人が合流したのである<sup>67</sup>。アゲーシラーオスはマンティネイアの領土を破壊した後アルカディアから撤退していった<sup>68</sup>。

この間アルカディア連合はエーリス人とともにアテーナイに支援を要請する使節を派遣している<sup>69</sup>。アテーナイはテゲアに対するマンティネイアの行為を平和条約の侵犯とみなし、アルカディア連合の要請を拒否したのである<sup>70</sup>。アテーナイに拒否されたアルカディア連合の使節はエーリス人と共にテーバイに赴き、テーバイ人に支援を要請している<sup>71</sup>。

### (3) 前三七〇年冬：ボイオーティア軍の第一次ペロポネソス進攻



アゲーシラーオスが率いるスパルタ軍がアルカディアから撤退した後、アルカディア連合はエーリス人やアルゴス人と共にヘライアへ懲罰の遠征を行っている<sup>72</sup>。遠征軍はヘライア領内にある家屋や樹木に破壊行為を加えたが、ヘライアは抵抗の姿勢を失わなかった。その間にボイオーティアとその同盟諸国軍のマンティネイア到着の報が届き、遠征軍はヘライアより撤退しボイオーティア軍と合流している。

マンティネイアに到着していたボイオーティア軍はポーキス、両ロクリス、アカルナニア、ヘーラクレイア、マリスそれにテッサリアの部隊を擁し、エパメイノンダスの指揮下にあった<sup>73</sup>。

マンティネイアにおいて各国の指揮官たちの会議が開かれた<sup>74</sup>。アルカディア連合やアルゴス、エーリスの代表はラコニアへの侵攻を提案し、ボイオーティア人の代表は難色を示している<sup>75</sup>。クセノポンはボイオーティア人の代表がラコニア侵攻の提案に難色を示した理由を二つ挙げている<sup>76</sup>。一つはラコニアへの侵攻は地理的に困難であること。もう一つの理由は外敵の侵入がラコニアの住民を結束させ、侵入者に対して激しく抵抗するものと予想されることであった。プルタルコスはもっと重要な理由を挙げている<sup>77</sup>。ボイオーティア軍の指揮官たちの任期は後数日しか残されていなかったのである。しかし、ラコニア北部の町、カリュアイから来た人々がもたらした情報はボイオーティア軍指揮官たちの意見を変えさせたのである<sup>78</sup>。

カリュアイからの人々はスパルタが置かれている困窮した状態を語り、ペリオイコイと呼ばれる人々はスパルタ防衛に協力しようとしておらず、外国の軍隊が姿さえ見せれば彼らはスパルタから離れていくだろうと伝えたのである。その上で自分たちが道案内をしようとして約束し、会議はラコニア侵攻を決定したのである。

侵攻軍の規模は重装歩兵だけで四万名、騎兵や軽盾兵、その他の人々を含めると七万名に達したと言われている<sup>79</sup>。侵攻軍は四つの地点からラコニアに侵攻を開始したのである<sup>80</sup>。スパルタはオイオンとレウクトロンの二ヶ所に守備隊を設置してこれに備えていたが、何れも侵攻軍によって撃破されてしまった<sup>81</sup>。侵攻軍はカリュアイで合流し、セッラシアに前進してこれを落とし、スパルタを目指して南下していった<sup>82</sup>。

ポリス存亡の危機に立たされたスパルタはクセナゴスを同盟諸国に派遣して援軍を要請し<sup>83</sup>、ヘイロタイに対しては解放を約束して協力を求めたのである<sup>84</sup>。六千名以上のヘイロタイがスパルタの防衛に馳せ参じたと言われている<sup>85</sup>。約二百名のテゲア人亡命者<sup>86</sup>、約四百名のボイオーティア人亡命者<sup>87</sup>、約五百名のアルゴス人亡命者<sup>88</sup>、少なからざるペリオイコイもスパルタ防衛に加わっている<sup>89</sup>。

コリントスやプレイウス、シキュオン、エピダウロス、トロイゼン、ヘルミオネ、ハリエイヌ、ペッレーネーが援軍派遣を決定している<sup>90</sup>。援軍は敵対地域を通る陸路を避け、ハリエイヌから海路ラコニア東岸のプラシアイに上陸し、パルノン山脈を越えてスパルタに到着したのである。彼らがスパルタの町に到着したのは侵攻が始まって二日目のことであった。援軍の総数は約四千名に上ったと言われている<sup>91</sup>。

侵攻軍は略奪と破壊を繰り返しながらスパルタの前面を通過してアミュクライにまで到達したのである<sup>92</sup>。テオポンポスが戦の流れと波と呼ぶ侵攻軍を眼前にして、スパルタ人の間に動揺が広がった<sup>93</sup>。二百名ばかりの不穏分子がイッソリオンを占拠し、別の規模の大きな陰謀が密告された。これらは何れも未然のうちに鎮圧され、首謀者たちは密かに処刑されたのである<sup>94</sup>。スパルタの防衛に加わっていたペリオイコイやヘイロタイも大きな衝撃を受け、彼らの多くは夜陰にまぎれて逃亡してしまった<sup>95</sup>。

スパルタの町そのものへの攻撃は侵攻三日目と四日目に行われた<sup>96</sup>。スパルタは巧みな防衛によって侵攻軍の攻撃をよく防ぎ、数の少ない防衛側を開豁地に誘き出そうとする攻撃側の誘いにも乗らず、町の防衛を堅持し続けたのである<sup>97</sup>。結局侵攻軍はスパルタの町を奪取することを諦め、攻撃の矛先をラコニア南部のヘロスとギュテイオンに転じたのである<sup>98</sup>。

侵攻軍の一部はメッセニアに進出し、メッセニア人の大部分は直ちにスパルタから離反したのである<sup>99</sup>。エパメイノンダスはアルカディア人ら同盟諸国と協議の上、メッセネ市の建設を決定したのである<sup>100</sup>。国外に亡命していたメッセニア人は呼び戻され<sup>101</sup>、ボイオーティア人やアルカディア人、アルゴス人の協力の下に町は建設された<sup>102</sup>。町の完成には八五日を要したと伝えられている<sup>103</sup>。

この間にスパルタは同盟諸国と共にアテーナイに使節を派遣して支援を要請している<sup>104</sup>。アテーナイでは元々親アルカディア派の勢力が影響力を有しており、スパルタに対する反感は市民の間に根強かった<sup>105</sup>。しかし、テーバイの急速な強大化はアテーナイに警戒心と妬みの感情を惹き起こしていた<sup>106</sup>。テーバイを抑えるためにスパルタの消滅は避けなければならなかった。テーバイとスパルタが対立しあっている状況こそがアテーナイにとって望ましいものであった<sup>107</sup>。スパルタ支援を主張するカッリストラトスの論が民会を通り<sup>108</sup>、イピクラテスが援軍の指揮官に選出された<sup>109</sup>。イピクラテスは一万二千名もの援軍を率いてコリントスに向かい、さらにアルカディアへと進出していったのである。

長期に亘ってラコニアに展開して破壊活動を続けてきた侵攻軍は必要物資の調達が困難になってきていたのでそれぞれ本国へと引き揚げていった<sup>110</sup>。イピクラテスはコリントスのケンクレアイでボイオーティア軍の撤退を妨害したが、二〇名の戦死者を出して後退し、ボイオーティア軍は無事帰国を果たしたのである<sup>111</sup>。前三六九年春のことであった。

このようにしてスパルタをその歴史上初めてという重大危機に陥れ、アルカディアさらにはメッセニアという重要地域を喪失させた前三七〇／六九年度は幕を閉じたのである。スパルタの危機はまだまだ続く。アルカディアとエーリス、さらにはボイオーティアの間に反目が生じ<sup>112</sup>、これらの反スパルタ大「連合」にひびが入り、前三六八年夏にいわゆる「泣かない戦争」<sup>113</sup>でアルカディア連合軍に大打撃を与えるまでスパルタの危機は立ち去らなかった。

### 三 前三六九年の事件

#### 1. 前三六九年初夏：夏季に備えての両陣営の準備

前三六九年初夏、スパルタは同盟諸国の代表とともに使節団をアテーナイへ派遣した<sup>114</sup>。アテーナイと同盟条約を結ぶことが目的だった。「最も著名な人々 *hoi epiphanestatoi*<sup>115</sup>」を使節に選び、全権を付与していたこと<sup>116</sup>は、スパルタの真剣さを示している。アテーナイはテーバイと対抗する勢力としてのスパルタの消滅を望まなかった<sup>117</sup>。

この時点では、アテーナイ人はスパルタとの同盟を論議するのを当然のこととしていた。両国の同盟が「対等な義務と権利を目的とする *epi tois isous kai homoiois*」精神に基づくという趣旨では両国とも一致していた<sup>118</sup>。論争されたのは同盟の運用に関してであった。アテーナイは海上の、スパルタは陸上の支配権を掌握する、という点では問題はなかった。陸上における戦闘の場合、スパルタが同盟軍を指揮するという点が問題とされた。

スパルタとその同盟諸国の使節は陸上でのスパルタの単独指揮を主張した<sup>119</sup>。アテーナイ側は、陸上でも海上でもスパルタは共通の指揮権に与る、と主張したのである。クセノポンの伝えるところによると、ケピソドトスは両国が五日目毎にそれぞれ指揮権を交代すると提案したということである<sup>120</sup>。ケピソドトスの提案はアテーナイとスパルタとの現実の力関係に相応し、アテーナイの利害と合致していた。アテーナイはケピソドトスの提案を採用した。スパルタはこれを認めざるを得なかった。現実を前にして、スパルタは帝国の理念であった陸上における指揮権の独占という大原則を放棄せざるを得なくなってしまったのである。

スパルタと同盟諸国がアテーナイで交渉していた頃、アルゴスやアルカディア連合など敵対諸国も短期の活動を展開していた。アルゴスはプレイウスに懲罰の為の遠征軍を派遣した<sup>121</sup>。プレイウスがスパルタを熱心に支援したことが理由とされた。しかし実際には、アルゴスのペロポネソス北東部への支配権拡大への欲求が動機であっただろう。アルゴスは全軍を挙げてプレイウス領に侵入し、領土を破壊したが、ポリス本体を占領するにはいたらなかった。撤退時に六十騎のプレイウス騎兵部隊の追跡を受け、若干の損害を後衛に出している。

アルカディア連合は独自の計画に従ってラコニアのペッラナに遠征している<sup>122</sup>。リュコメデス指揮下の選抜部隊 *hoi epilektoi* はペッラナを強襲し、これを占領したのである。三百名の守備兵は殺害され、ポリスそのものは奴隷化され、領土は破壊された。アルカディア軍はスパルタから援軍が到着する前に撤退したのである。

史料は触れていないが、エーリスは失地回復のために南部や東部地域に圧力を加えていたと思われる。

## 2. 前三六九年夏：ボイオーティア軍の第二次侵攻

その後、それぞれも短期の活動を終えたアルカディア連合とアルゴス、エーリス人は夏季の活動に関して同盟会議を開いている<sup>123</sup>。彼等はペロポネソス北東部に共同で遠征し、当該地域のスパルタ側の諸都市を制圧することを決定したのである。支援を要請する使節がテーバイに派遣された<sup>124</sup>。

ボイオーティア連合はテッサリアやマケドニアに干渉していたにもかかわらず、ペロポネソスへの再度の出兵に同意している。エパメイノンダスの下、七千名の重装歩兵と七百騎の騎兵が派遣されることとなった。

ボイオーティア軍進出の報に接し、アテーナイはイストモスに防衛線を形成しようとしてカブリアスとその指揮下の部隊をペロポネソスに派遣したのである<sup>125</sup>。コリントスにおいてアテーナイ軍はコリントスやペッレーネーなどのペロポネソス北部の諸国軍と合流している<sup>126</sup>。ペロポネソス南部からスパルタ部隊が到着し、防衛軍約二万名は前進して、オネイオン山に沿って阻止線を形成して前進してくるボイオーティア軍に備えたのである<sup>127</sup>。

アルカディア連合、アルゴス、エーリスの連合部隊はネメア路を北上中、プレイウス奪取の提案をプレイウス人亡命者から提案された<sup>128</sup>。プレイウス奪取の計画は亡命者たちと市内に残されていた民主派<sup>129</sup>との間で了解されていた。

亡命者とその協力者たち約六百名は夜の間市壁の下で待機していた。夜明けになって、敵の大部隊の接近がトリカラノンの哨兵によって発見され、ポリスに伝えられた。市内の人々の注意が接近中の敵部隊に向けられている間に、市内に残留していた同調者たちは市壁の下で待機している人々に合図を送ったのである。亡命者たちは梯子で市壁をのぼり、十名の哨兵をたちまち圧倒したのである。眠っていた人々やヘーライオンへ逃げた人々は殺されてしまった<sup>130</sup>。亡命者たちはアクロポリスを占領し、一部はポリスに向かったのである。

アクロポリスから市内に通じる門の前で亡命者たちは市内から出て来た重装歩兵隊と衝突してしまった<sup>131</sup>。人数に劣り、包囲を恐れた亡命者たちはアクロポリスへ引き揚げてしまった。それと共に、プレイウス側の重装歩兵部隊がアクロポリスになだれ込んだ。亡命者たちはアクロポリスの防衛をあきらめ、市壁や塔によって抵抗することに決したのである。この時、プレイウスはアルカディア連合とアルゴス、エーリスの連合部隊によって完全に包囲されていた<sup>132</sup>。

市壁や塔の付近では亡命者たちとプレイウスの重装歩兵隊が戦った。プレイウス側は亡命者たちを排除するために、アクロポリスに貯えられていた藁束に火をつけたのである。亡命者たちは塔を放棄し、市壁から飛び下りている。包囲していた部隊は市僻に攻撃を仕掛けたが、プレイウスの騎兵部隊が出て来たのを見て、攻略を断念したのである<sup>133</sup>。

ボイオーティア軍はイストモスの阻止線から約五・六キロ離れた地点に到着し、陣を張った<sup>134</sup>。夜明け、ボイオーティア軍はスパルタ部隊とペッレーネー部隊が守備する戦区を奇襲した<sup>135</sup>。守備隊は近くの丘に逃れ、スパルタ軍指揮官は同盟諸国軍から十分な支援を利用して防衛し得たにもかかわらず、抵抗することなく休戦協定を結んでボイオーティア軍を通過させてしまった<sup>136</sup>。この行為は、クセノポンも暗示しているように、同盟諸国の批判を招いた。この結果、防衛線の計画全体が無効となってしまったばかりでなく、後方の同盟諸国の安全そのものが脅かされることとなった。

イストモスに集結していた防衛軍は直ちに解散し、各国の部隊は自国の防衛に就いたの

である。スパルタは敵の攻撃目標となるシキュオンの防衛を強化するために、小邑ポイビアに多くのポイオーティア人亡命者を派遣している<sup>137</sup>。他方、アテーナイ軍はコリントスの防衛に協力している。

ポイオーティア軍は、アルカディア連合、アルゴス、エーリスの連合部隊と合流し、シキュオンに向かって進撃したのである。シキュオン軍は迎え撃ったが、戦いに敗れ、指導的な人物を失っている<sup>138</sup>。ポイビアは占領され<sup>139</sup>、シキュオンに対しても圧力が加えられた<sup>140</sup>。シキュオンの支配層は恐慌状態に陥り、民衆の蜂起を恐れた彼らは寡頭政の存続を条件に降伏し、スパルタからの離反を決定したのである<sup>141</sup>。エパメイノンダスは寡頭政の存続を承認し、ハルモステスと駐留部隊をシキュオンに設置したのである。ペッレーネーも同様の過程を経てスパルタとの同盟関係を断ったものと思われる<sup>142</sup>。

エパメイノンダスはアルゴリスにも進出する。エピダウロスやトロイゼンに侵入し、これらの領土を破壊したのである<sup>143</sup>。プレイウスも攻撃を受けたものと思われる<sup>144</sup>。しかし、侵入軍は期待したほどの成果をあげることができなかった。というのはこれらの諸国を屈服させることができなかったからである。エパメイノンダスはコリントスに矛先を転じる。

コリントス軍は迎え撃したが、手痛い敗北を被っている<sup>145</sup>。侵攻軍の一部は敗走するコリントス軍を追って解放されたまま放置されている市門に突入しようとしたのである<sup>146</sup>。恐怖に駆られたコリントス人は戦意を喪失し、身の安全を求めて各自の家の中へ逃げ込んでしまった。

カブリアスは市を防衛するためにアテーナイ軍と傭兵隊を率いて出撃し、両軍は市壁の近くで衝突した。侵攻軍は大いに苦しめられ、遂に後退を余儀なくされたのである<sup>147</sup>。特にテーバイの神聖部隊の損失は大きかったようである。

この戦闘が戦われている間に、ケルト人やイベリア人からなる傭兵隊と五十騎の騎兵がスパルタ支援のためにシケリアからコリントスに到着していた<sup>148</sup>。

翌日、エパメイノンダスは全軍をコリントス平野に展開させ、戦列を組ませて組織的に破壊を行なわせた<sup>149</sup>。防衛側は敵の破壊活動を妨害するために、アテーナイ、コリントス及びディオニュシオスの騎兵部隊に牽制行動をとらせたのである<sup>150</sup>。その後、エパメイノンダスは防衛側を決戦に誘い出せず、何の成果を挙げることもないままコリントス領に滞在することとなった。侵攻軍はそれ以上為し得ず、解散し、それぞれ本国に引き揚げていった<sup>151</sup>。

夏の残りの期間、スパルタ側は部分的な反撃を行ない、ディオニュシオスの騎兵部隊を擁してシキュオンに侵入した<sup>152</sup>。スパルタ軍は迎え撃ってきたシキュオン人を破り、デラスを強襲して占領したけれどもシキュオンを屈服させるにはいたらなかった。夏の終わりに、ディオニュシオスの傭兵隊はシケリアへと去っていった。

### 3. 前三六九年秋：メガレポリスの建設

アルカディアでは連合結成以来、種族主義が徐々に高まりつつあった。ポイオーティア

人がペロポネソスで蹉跌したことはその軍事上の名声に疑念を生じさせていた。又、シキユオンに対する処置に見られるようにアルカディア連合とボイオーティアとの間に利害の不一致が大きくなっていった。連合はボイオーティアの指導から脱してペロポネソスの支配権を目指すことに決したのである<sup>153</sup>。

種族主義的感情に基づく政策を立案し実施したのがマンティネイアの民主派指導者リュコメデスであった<sup>154</sup>。彼の政策は二つの方向を有しており、しかも同時に実施されたのである。一方は連合の対外的拡大を希求し、他方は連合の内的統合強化の方向を目指していた。

同年秋、アルゴスはエピダウロスに遠征した<sup>155</sup>。エピダウロス救援に出動したカブリアス指揮下のアテーナイ軍とコリントス軍はアルゴス軍の交通線を遮断し、これを閉塞してしまったのである。アルカディア連合は援軍を派遣し、閉塞部隊と戦い、エピダウロス領を破壊しながら窮地に陥っていたアルゴス軍を救出した。

その後、アルカディア連合軍はラコニアに遠征し、アシネ前面にまで進出したのである。アシネを守備していたスパルタ軍を破り、指揮官を戦死させたが、アシネを占領することは出来なかった。アルカディア連合軍はアシネ郊外を略奪したのである。

同じ頃、アルカディア連合はメガレポリスの建設に着手した。アルカディア南部のヘリッソン川流域に、川をはさんで新しい都市が建設されることになった。新都市は従来都市的組織を持たず、村落や半都市的定住地からなっていた地域を領域としていた。マイナリア、エウトレシア、パッラシア、キュヌリア、アイギュティスが対象とされた<sup>156</sup>。連合は十名の新都市建設委員を選出した<sup>157</sup>。マンティネイアはリュコメデスとホポレアス、テゲアはティモンとプロクセノス、クレイトルはクレオラオスとアクリピオス、マイナロスはエウカンピダスとヒエロニューモス、パッラシアはポッシクラテスとテオクセノスを選出したのである。

リュカリア、トリコロニ、リュコスラ及びトラペゾスの人々は定住地の蜂起と新都市への移住を拒んだが、連合は武力を行使して反抗する人々を強制的に移住させたのである<sup>158</sup>。テーバイはスパルタの妨害から建設を守るという口実でパンメネス指揮下の千名の選抜部隊を派遣している<sup>159</sup>。

#### 4. 前三六九／三六八年冬：アルカディア連合とエーリスの確執

前三六九／三六八年冬、アルカディア連合は西方への遠征を行なった<sup>160</sup>。アルカディア西部のヘライア、テルプサがスパルタとの関係を絶ってアルカディア連合に参加している。これらアルカディア諸市と関係の深いアクロレイア、ピサティス、トリピュリアの諸都市もスパルタから離反し連合に加入している<sup>161</sup>。エーリスはアクロレイア、ピサティス及びトリピュリアの連合編入に抗議している。連合はこれらの地域の住民がアルカディア人であるという理由でエーリス人の抗議を却下したのである。

このようなアルカディア連合の拡大はテーバイに *hypophthonos* を、エーリスに

dysmenosを生じさせ、テーバイーアルカディア連合ーアルゴスーエーリスの反スパルタ同盟を弛緩させることとなった<sup>162</sup>。

#### 四 前三六八年の事件

##### 1. 前三六八年春：デルポイでの平和会議

前三六八年春、プリュギアの太守アリオバルザネスはアビュドスの人ピリスコスをギリシアに派遣した<sup>163</sup>。彼はピリスコスに平和会議の設営と傭兵の雇入れの責任を負わせていたのである。ピリスコスはデルポイに到着し、主な交戦国に戦争の停止とコイネー＝エイレーネーを呼びかけた。シケリアの僭主ディオニュシオスも同じ頃使節団をギリシアに派遣している<sup>164</sup>。彼らはデルポイの神殿の再建と平和を提案する文書grammat[on]を携えていた<sup>165</sup>。ディオニュシオスの提案とピリスコスの提案は内容的に余り相違がなかったと思われる。

アテーナイを初めとする各国は平和会議を歓迎している<sup>166</sup>。テーバイにおいてもこの頃平和派が台頭していた<sup>167</sup>。デルポイに各国の使節が集まり、平和会議が持たれたのである。会議の席ではメッセニアの独立を承認する問題とボイオーティア諸都市の自治権をめぐる問題でスパルタとテーバイが対立し、会議は行き詰まってしまった<sup>168</sup>。スパルタはメッセニアの、テーバイはボイオーティア諸都市の《アウトノミア》を認めようとしなかったからである。結局、会議は失敗に終わってしまった。

テーバイの態度に反感を抱いたピリスコスは数多くの傭兵を雇ってスパルタに提供している<sup>169</sup>。アテーナイはディオニュシオスやピリスコスの平和工作を歓迎し、ピリスコスに市民権を与え、ディオニュシオスがアテーナイ人とその同盟諸国に対して「善良なる人々 andr/es agathoi」かつ「友人 philias」であるとして、ディオニュシオスとその二人の息子に金冠と市民権を付与している。

##### 2. 前三六八年夏：泣かない戦い

同年夏、テーバイはテッサリアやマケドニアに干渉し、ペロピダスとイスメニアスを派遣している<sup>170</sup>。他方、アテーナイはスパルタの同盟国であるレウカスと同盟条約を締結して、スパルタとの連携を強化している<sup>171</sup>。

ディオニュシオスはカルタゴが疫病で疲弊している間にカルタゴ領のシケリアを征服しようと計画していた<sup>172</sup>。その為に、彼はギリシア本土の平和を望んでいた。彼の使節がもたらした情報は平和会議の失敗であった。大遠征軍を派遣する前か或いはその最中であつたかは不明であるが、ディオニュシオスはスパルタにキッシダス指揮下の傭兵隊を援軍として派遣している<sup>173</sup>。

ディオニュシオスの援軍はコリントスに到着し、同盟諸国はコリントスにおいて会議を開いたのである。ディオニュシオスの援軍をどの方面で活用するのかが議題となった。ボイオーティア軍のテッサリア進出<sup>174</sup>を警戒していたアテーナイは援軍をテッサリアへ転用

するよう提案したが、スパルタはペロポネソスでの活用を提案し、他の同盟諸国の賛同を得ている。

援軍はラコニアに回航し、アルキダーモス指揮下のスパルタ軍とともにアルカディアへと遠征したのである<sup>175</sup>。アルキダーモスはスパルタから離反していたペリオイコイの町カリュアイを占領し、捕えた住民を処刑している。次いでカリュアイからアルカディアのパッラシアに侵攻し、その地方を略奪したのである。

パッラシアの人々を救援するためにアルカディア連合とアルゴスの部隊が接近してきた<sup>176</sup>。アルキダーモスはメレア付近の丘に後退し、キッシダスは期限が過ぎたと宣言して傭兵隊を率いてスパルタへ単独で引き揚げていった。しかし、アルキダーモスのアルカディア進出に脅威を感じていたメッセニア人はアルキダーモスとスパルタの交通線を遮断していた。その為にキッシダスは退路を断たれ、アルキダーモスに支援を求めている。アルキダーモスがキッシダスと合流してエウトレシアへの岐路まで後退した。その時、アルキダーモスはアルカディア連合とアルゴスの部隊がラコニアに向かって進軍しているのを目撃したのである。

アルキダーモスはエウトレシア路とメレア路の合流点で指揮下にある部隊に戦列を組ませた<sup>177</sup>。アルカディア連合とアルゴス側はスパルタ側の攻撃を支えきれず、瞬く間に全軍が潰走してしまった<sup>178</sup>。敗走の中でスパルタ人騎兵とケルト人騎兵の追跡を受け、多くの者が殺された。アルカディア連合側が一万人もの戦死者を出したのに、スパルタ側は一人も戦死者を出さなかったと伝えられている<sup>179</sup>。

アルキダーモスは戦勝碑を建て、勝利を知らせる使者をスパルタに派遣した。スパルタではアゲーシラーオス、長老会の議員、エポロイ以下の人々が喜びの涙でこの知らせを迎えたのである。アルカディア連合の不幸を歓迎したのはスパルタとその同盟諸国だけではなかった。アルカディア連合の同盟国であるテーバイやエーリスも歓迎したのである。

大敗北を喫したにもかかわらず、アルカディア連合とアルゴスはプレイウスへ全軍を派遣している<sup>180</sup>。プレイウスに対する怒りと、プレイウスが両者間の交通を妨害していることが理由であった。プレイウスの騎兵部隊と選抜部隊はアテーナイの騎兵部隊の支援を得て、渡河点でこれを襲い撃退するのに成功している。

この頃アテーナイはアルカディア北部のステュンパロスと条約を結んでいる<sup>181</sup>。

## 五 前三六七年の事件

### 1. 前三六七年春：アテーナイとスパルタの外交活動

前三六七年初春、アテーナイは積極的に外交を展開した。アテーナイはレナイア祭においてディオニュシオスの悲劇に一等賞を与え<sup>182</sup>、スパルタに使節団を派遣している<sup>183</sup>。アテーナイはスパルタ人コロイボスを称賛する決議をし、コロイボスがアテーナイ人に対して「善人 *aner agath[os]*」であり、彼とその子孫にプロクセノスの名誉を与えたのである<sup>184</sup>。

その後アテーナイはディオニュシオスと同盟を結ぶのに成功している<sup>185</sup>。アテーナイは



ディオニュシオスを「善人[aner] agathos」と称賛し、ディオニュシオスとその子孫を永久の同盟者としている<sup>186</sup>。当事者の一方が領土を侵犯された時には他方が全力でこれを支援し、当事者の一方は他方に敵意をもって兵を進めてはならないことが規定された<sup>187</sup>。

同年春、スパルタ派ペルシアとの同盟を求めて使節を派遣している<sup>188</sup>。スパルタの使節はペルシアと交渉に入ったが、ペルシアの態度は全く冷淡で、スパルタ側の提案に全く関心を示さなかったのである<sup>189</sup>。

## 2. 前三六七年夏：テーバイの遠征活動

エパメイノンダスは同盟諸国、特にアルカディア連合に対するテーバイの指導力を回復し強化しようとしていた<sup>190</sup>。そのためにアカイアの中立諸国を同盟化する計画を立てていた<sup>191</sup>。エパメイノンダスはペロポネソスへの侵入路を確保するためにアルゴスの将軍ペイシアスにオネイオンの占領を説得した。スパルタのナウシクレオスとアテーナイのティモマコスの指揮下に傭兵隊がオネイオンを守備していたのである。

ペイシアスは二千名の重装歩兵を率い、守備隊の不注意に乗じてケンクレアイの要衝を占領した<sup>192</sup>。ボイオーティア軍のペロポネソス侵入路は開放された。エパメイノンダスはボイオーティア軍を率いてペロポネソスに侵入し、ペロポネソスにおける同盟軍と合流した。

同盟軍はアカイアへ進撃し、抵抗する意思を持たなかったアカイアの指導者たちはエパメイノンダスのもとに使節を派遣している。交渉の結果、テーバイはアカイアの内政に干渉せず、「有力者hoi kratistoi」や「貴人hoi beltistoi」を追放せず、国制を変更しないことを保障し、その見返りとしてアカイアはテーバイの同盟に加わり、テーバイの無制限な指揮に服すると誓約したのである。アカイアは海外に領有していたデュメ、ナウパクトス、カリュドンを放棄し、テーバイはこれらの諸都市をアイトリア連合とエーリスに返還している<sup>193</sup>。

エパメイノンダスはボイオーティア軍を率いてテッサリアに侵入した<sup>194</sup>。彼はアレクサンドロスの勢力を決定的に壊滅せず、圧力を加えてアレクサンドロスと交渉の席につかせことにしたのである。アレクサンドロスは使節を派遣した。ペロピダスとイスメニアスを釈放させ、三十日間の休戦協定を結んでエパメイノンダスはテーバイに引き揚げた。

## 3. 前三六七年秋：ペルシアでの平和会議

前三六七年秋、スパルタの使節がスーサにいるのを知ったテーバイはレウクトラ以降生じた力関係の変化とメッセニア独立の既成事実の承認を求めて、使節の派遣を決意したのである<sup>195</sup>。

テーバイは同盟会議を招集し、各同盟国がそれぞれ使節を派遣することになった。ボイオーティアはペロピダスとイスメニアスを、アルカディア連合はアンティオコス、エーリスはアルキダーモスを、アルゴスも使節を派遣したのである<sup>196</sup>。テーバイの動きに対抗

してアテーナイもティマゴラスとレオンを派遣した。

十月、アテーナイはアイトリア同盟に抗議している<sup>197</sup>。エレウシスの秘儀のために休戦を布告していた使節がアイトリア同盟に所属するトリコネイオンの人々によって拘束されたからである<sup>198</sup>。アテーナイはアイトリア同盟に捕えられている使節の釈放を要求したのである<sup>199</sup>。

この頃、アルカディア連合はステュンパロスを含むアルカディア北部を連合に加入させるのに成功している<sup>200</sup>。

## 六 前三六六年の事件

### 1. 前三六六年春：テーバイとシキュオンの政変

前三六七年暮れか翌年の初春、アルカディア人とテーバイの反エパメイノンダス派の人々 *hoi antistasiotai* はエパメイノンダスを弾劾する運動を展開した。彼らはエパメイノンダスがスパルタの利益となるようにアカイアを処理したと非難したのである<sup>201</sup>。

その結果、エパメイノンダスの指導力は低下し、反エパメイノンダス派が民衆の間で力を持つようになった。テーバイはエパメイノンダスの処置を撤回している。ハルモステスがアカイアへ派遣され、地元の大衆 *ho plethos* の協力を得て政権を掌握していた「貴人 *hoi beltistoi*」や「有力者 *hoi kratistoi*」を追放し、寡頭政を廃止して民主政を導入している<sup>202</sup>。

追放された寡頭派は少数でなかった。彼らは直ちに結集し、それぞれの都市に向かって兵を進め帰国を果たしている<sup>203</sup>。彼らは国制を寡頭政に戻し、アルカディア人に対する敵意からスパルタとの同盟に復帰したのである。

アカイアの一連の政変はペロポネソス北部地域の緊張を高めることとなった。かつて親スパルタ派の指導者であったエウプロンはこのような状況を利用してシキュオンの指導権を掌握しようとしたのである<sup>204</sup>。

彼は、寡頭派への不信を強めていたアルゴスとアルカディア連合に対し、「最も富裕な人々 *hoi plousiotatoi*」が政権を担当している限り彼らがスパルタに寝返る危険性がある、と申し立てた。そして自分はスパルタの「不遜 *to phronema*」を耐えがたいと思っており「奴隷状態 *douleia*」を脱したことを喜んでいるのだから、自分こそ「民衆 *ho demos*」の指導者に相応しく、自分の「忠誠心 *pistis*」をアルカディアとアルゴス両国に捧げ、両国との関係を確実なものにしていくのだ、と述べている。この言葉を受けてアルカディアとアルゴスはエウプロンへの支援を約束したのである<sup>205</sup>。

エウプロンはアルゴス人とアルカディア人の臨席の下に民会を召集し、国制は「平等 *isos*」と「等質 *homoios*」に基づくとして寡頭政の廃止と民主政の成立を宣言したのである。民会はエウプロンを含む五名の人物を将軍に選出し、エウプロンは傭兵隊長のリュシメネスを解任して息子とのアデアスを後任に任命したのである。

約四十名の「最も富裕な人々 *hoi euprotatoi*」を「スパルタ最員の廉で *epi lakonismos*」追放し、その財産を没収している<sup>206</sup>。彼は没収した財産や国庫、神殿の宝庫を利用して傭

兵の待遇を改善し、その信頼を独占して傭兵隊の拡充に努めた。

## 2. スーサ及びテーバイにおける平和会議

その間、スーサでは各国の代表者たちがペルシアと交渉を進めていたのである。レウクトラの戦いとエパメイノンダスのラコニア侵攻はペルシア王に強い印象を与えていた<sup>207</sup>。

ペロピダスは、テーバイがペルシアとの関係でスパルタやアテーナイのように過去において汚点を持たないこと、過去一貫して親ペルシアであったこと、独力でスパルタと戦ったアルゴスとアルカディアが大敗を喫してしまったことを列挙して、テーバイの忠誠心と力を誇示したのである<sup>208</sup>。アテーナイのティマゴラスはペロピダスの発言を支持した。そこでペルシア王はペロピダスを、次いでティマゴラスを厚遇し<sup>209</sup>、スパルタの使節を全く無視したのである<sup>210</sup>。

ペルシアはテーバイをコイナー＝エイレーネーの保障国と位置付け、ペロピダスに平和条約案を諮問したのである<sup>211</sup>。ペロピダスはメッセニアの独立、トリピュリアやアクロレイア、ピサティスのエーリス帰属、各国の自治権の保障、作戦行動中のアテーナイ艦隊の引き上げ、平和条約に従おうとしない国に対する懲罰遠征軍派遣の義務を提案している<sup>212</sup>。アテーナイのレオンの不満に応じて、ペルシア王はペロピダスの案より正しい平和条約案があればアテーナイは大王に知らせること、という条項を追加した。

使節の帰国後、アテーナイではティマゴラスは背信行為の廉で処刑されている<sup>213</sup>。アルカディアでは使節のアンティオコスが万人会で不満の意を表明し、ペルシアの柔弱さとその富が見掛け倒しで過ぎないことを報告している<sup>214</sup>。逆にエーリスではアルキダーモスは大王の行為を称賛している。

テーバイにおいて開かれた平和会議の席上で、文書を携行してきたペルシアの使節は王の印章を示しながら、各国の使節に対して大王とテーバイに友好的であろうとする国が平和条約の遵守を誓約するようテーバイは命ずることという大王の命令を読み上げたのである。テーバイが各国の使節に誓約を迫った時、会議に出席していた使節たちは平和条約を聞くために派遣されたのであって、誓約するために派遣されたのではない、と拒否したのである。加えて、アルカディア人のリュコメデスはテーバイでの平和会議の必要性を否定している。リュコメデスに悪感情を抱いていたテーバイは、彼が同盟条約を破壊したと非難したのである。リュコメデスと他のアルカディアの使節は会議場から退席してしまい、テーバイにおける平和会議は失敗に終わってしまった。

テーバイは個別交渉によって各国に平和条約を承認させようとした<sup>215</sup>。ペロポネソスでの最初の訪問国であるコリントスはコイナー＝エイレーネーを必要としないと拒否している。エーリスとメッセニアを除く他のペロポネソス諸国も同じように拒否し、平和条約による覇権獲得というテーバイの試みは失敗に終わった。

この頃、エウプロンは同僚を処刑したり追放したりして政治的競争者を排除し、シキュオンにおける単独の支配権を掌握していた<sup>216</sup>。権力基盤を強化するために彼は奴隷を解放

し、市民権を付与して民衆層の育成に努めた。彼はこの政変が同盟諸国に承認されるために、同盟諸国の指導者たちに贈賄したり、同盟諸国の遠征に自ら傭兵を率いて参加したりしたのである。

### 3. 前三六六年夏：プレイウスの攻防

この頃、プレイウスは包囲下にあった<sup>217</sup>。アルゴスはプレイウス領内にある要衝トリカラノン要塞を要塞化し、プレイウス人亡命者を守備兵として配備したのである<sup>218</sup>。シキュオンは国境のトゥアミアの要塞化に着手していた<sup>219</sup>。コリントスとプレイウスの交通線は遮断されていた。プレイウス側の物資搬入を妨害するために敵の部隊が領内を巡回していたのである<sup>220</sup>。領土は破壊され、農作物の収穫は全く期待できなかった<sup>221</sup>。生活必需品の欠乏は絶望的であった<sup>222</sup>。にもかかわらずプレイウス人の戦意とスパルタとの連帯は堅持された。

シキュオンに駐在していたテーバイ人アルコンはプレイウスへの遠征を計画し、駐留部隊、シキュオン人及びペッレーネー人を動員したのである<sup>223</sup>。エウプロンは二千名の傭兵を自ら率いて遠征に加わっている<sup>224</sup>。

遠征軍はプレイウス領に侵攻し、トリカラノンを経由してヘーライオンへと向かった。そしてプレイウスからヘーライオンを経由してコリントスに通じる道を利用してプレイウス人が迂回することのないように、ヘーライオンにシキュオン人とペッレーネー人の部隊を警戒の任に就き、ボイオーティア人部隊とエウプロンの傭兵部隊は平野部に降りていったのである。

遠征軍の接近を知ったプレイウスは騎兵部隊と選抜部隊を差し向けて平野部への進出を阻止しようとしたのである。日中の大部分、小競り合いが続いた。傭兵部隊は平野部にたどり着いたがそれ以上は前進できず、逆にプレイウス側の重装歩兵部隊の一部がヘーライオンとの交通線上に進出したために、遠征軍は撤退を余儀なくされた<sup>225</sup>。

プレイウス人は撤退していく侵攻軍を少しの間追跡した後、矛先を転じ市壁の側面に沿ってヘーライオンに急行したのである<sup>226</sup>。ボイオーティア人部隊もプレイウス人の意図を察知し、ヘーライオンへと急いだ<sup>227</sup>。両軍の間に競争が生じ、先にヘーライオンに到達したのはプレイウス人であった。先ず騎兵部隊がペッレーネー人部隊に圧迫を加え、遅れて到着した重装歩兵部隊が再度の攻撃によって防衛側の戦列を突き崩すのに成功したのである。この戦いを見守っていたボイオーティア人とエウプロンの傭兵部隊は味方の敗北の後シキュオンへと立ち去っていった。

シキュオン人の損失は軽微であったが、ペッレーネー人の損失は大きかった<sup>228</sup>。プレイウスはこの戦いでペッレーネー人のプロクセノスを捕虜としているが、身代金を取ることなく釈放している<sup>229</sup>。そしてその後まもなくペッレーネー人はスパルタとの同盟に復帰している<sup>230</sup>。

食糧事情が悪化していたプレイウスはコリントスに駐在していたアテーナイ人の将軍カ

レスに必需品の搬送を依頼した。カレスがプレイウスに到着すると、プレイウス人は婦女子と老人のペッレーネーへの非難を護衛するようにカレスに頼んでいる。彼らはペッレーネーに到着すると物資を購入し、非戦闘員を残して夜の間に出立した。途中巡察中の敵と遭遇したが、これを排除するのに成功し、無事プレイウスに帰着するのに成功した<sup>231</sup>。

翌日、プレイウス人の騎士たちと重装歩兵の中で最も有用な人々 *hoi te hippies kai hoi chresimotatoi ton hopliton* がカレスにトゥミアの要塞奪取を持ちかけた<sup>232</sup>。騎兵と重装歩兵の中で最強の者たち *hoi hippies kai ton hopliton hoi erromenestatoi* が道案内すると約束したのである<sup>233</sup>。カレスはプレイウス人の騎兵や重装歩兵、直属の傭兵部隊を率いて出発した<sup>234</sup>。前進する速度は次第に速くなり最後には駆け足になっていった。

他方、要塞に居たシキュオン人は日没少し前だったため、水を浴びたり食事をしたり、パンをこねたり寝床の用意をしたりしていた。カレスとプレイウス人が急速に接近してくるのを見てシキュオン人は逃亡したのである<sup>235</sup>。プレイウス人はトゥミアの要塞を占領し、コリントスに要塞奪取を知らせる使者を派遣したのである。コリントスはプレイウスへの穀物の搬送をはじめ、トゥミアの要塞工事が完成するまで続けている。

#### 4. シキュオンを巡る問題

アルカディア連合はシキュオンに干渉し、エウプロンの僭主化を否定したのである<sup>236</sup>。ステュンパロスのアイネイアスは部隊を率いてアクロポリスに登り、市内にいた「最も有力な人々 *hoi kratistoi*」や「亡命者たち *hoi aneu dogmatos ekpeptokotes*」を集めたのである。エウプロンは港に逃げ、コリントスに駐留していたラケダイモン人パシメロスと呼び寄せ、港をスパルタに引き渡したのである<sup>237</sup>。そうして自分は常にスパルタに対しては忠実であったと言って、スパルタとの同盟に復帰したのである。

シキュオンでは、アルカディアの支援を受けた「最良の人々 *hoi beltistoi*」とエウプロンを支持する「民衆 *ho demos*」との間で内乱が生じた<sup>238</sup>。

エウプロンはアテーナイに赴き、傭兵を雇い入れて戻って来た。彼は民衆の助けで市街地の支配権を回復し、敵対する人々はテーバイ人のハルモステスが保持していたアクロポリスに逃げ込んだのである。エウプロンは武力によってアクロポリスを奪取しようとしたが成功しなかった<sup>239</sup>。そこで彼は友好的な手段によってアクロポリスの返還と「最も有力な人々 *hoi kratistoi*」に対するテーバイの保護を解除させようと試みたのである<sup>240</sup>。彼は再びスパルタとの同盟を破棄し、テーバイとの同盟に復帰している。

同年夏、アッティカ北東部のオロポスが反アテーナイ派の亡命者とエレクトリアの僭主テミソン及びテオドロスによって占領されたのである。同年夏、アッティカ北東部のオロポスが反アテーナイ派の亡命者とエレクトリアの僭主テミソン及びテオドロスによって占領された<sup>241</sup>。アテーナイはカレスを呼び戻し、総力を挙げてオロポス奪回を企てたのである。驚いたテミソンはオロポスの守備をテーバイに委ねた。アテーナによる奪回の試みは失敗に終わったが、テーバイはオロポスの町をテミソンに返さなかった。

アテーナイでは支援に馳せつけてこなかったペロポネソスの同盟諸国に対する不満が高まっていた<sup>242</sup>。アルカディア連合の指導者リュコメデスはこのような状況を利用してアテーナイとの同盟を一万人会で提案したのである<sup>243</sup>。提案は承認され、リュコメデスはアテーナイに赴いて同盟の提案をしている。

リュコメデスの提案はアテーナイをジレンマに追い込んだ。アルカディアとの同盟は基本的には利益となる。しかしスパルタはアテーナイと同盟条約を結んでおり、スパルタの友好国 *philoï* であった。そのアテーナイがスパルタの敵 *enantioi* であるアルカディアの同盟国 *symmachos* になるのである。反対意見はあった。しかし、アテーナイがアルカディアと同盟を結ぶことはアルカディアがテーバイに支援を求めなくなり、そのことがスパルタにとっても利益 *agathon* となると解釈して、リュコメデスの提案を受け入れたのである。

アテーナイからの帰途、リュコメデスはアルカディア人亡命者によって殺された<sup>244</sup>。アテーナイはカッリストラトスを使節として派遣し、対抗してボイオーティアもエパメイノンダスを派遣している<sup>245</sup>。エパメイノンダスはアテーナイとの同盟条約の成立を阻止することは出来なかったが、ボイオーティアとの同盟条約の破棄を思いとどまらせるのには成功している。

エウプロンはテーバイの当局者を買収しようと企てた<sup>246</sup>。彼は賄賂を携えてテーバイに赴き、敵対派もエウプロンの意図を察知して後を追った<sup>247</sup>。彼らはエウプロンが当局者たちと親しく交渉しているのを見て、エウプロンがその目的を達してしまうのではないかと怖れ、その場でエウプロンを殺害したのである。

テーバイの当局者たちは殺害した者たちを評議会に告発した。当局者たちは事件の国際的な反響を恐れたのである。殺害した者たちの行為が無情 *tolme* かつ残忍 *he miaria* であり、テーバイの国法と権威を冒しているとして告発したのである<sup>248</sup>。被告は一人を除いて罪状を否認し、罪状を認めた被告は次のように弁論している<sup>249</sup>。

自分はテーバイの国法を無視したことを否定する。エウプロン殺害はアルキアスとヒュパテス派の人々に対するテーバイ民主派の行為を先例としている。神聖でない人間や裏切り者で僭主である人間は人類全体によって既に死刑の判決が下されている。従って、判決がなくとも可能な時に処刑できるのだ。神聖でないという理由としてエウプロンによる神殿宝庫の略奪をあげることができる<sup>250</sup>。裏切り者であるという理由としてエウプロンは最初にスパルタを裏切ってテーバイにつき、次いでテーバイを裏切ってスパルタ側に組したことを指摘できる。僭主であるということの理由として奴隷を解放しただけではなく市民としたことと、「悪人 *hoi adikountes*」ではなく「最良の人々 *hoi beltistoi*」を処刑し、彼らを追放して財産を没収したことである。

加えてテーバイ最大の敵であるアテーナイの支援を得てポリスを奪回し、テーバイのハルモステスに対して武装したことが明らかにされている<sup>251</sup>。エウプロンは買収によってテーバイを墮落させようとしたのである。従ってエウプロン殺害は正しいとされる。

一体ギリシアのどこに裏切り者や僭主たちと協定する者が居るのか<sup>252</sup>。同盟条約は同盟

国の亡命者が全同盟領域から法律の保護を奪われると規定している<sup>253</sup>。同盟総会の決定なしに帰国した者を処刑するのは決して「不正ou dikaion」ではない。従って、エウプロン殺害者を処断するのは利敵行為であり、エウプロン殺害を正当とするならそれは全同盟国による報復行為となる。

テーバイの評議会はエウプロン殺害を正当と判断したのである<sup>254</sup>。しかしシキュオンの「大衆hoi pleistoi/ hoi politai」はエウプロンを「善人andros agathos」と見なし、アゴラに埋葬して、「ポリスの創建者archegetes tes poleos」として崇拜したのである。この後シキュオンはスパルタ側の防備の手薄に乗じて港を奪回している<sup>255</sup>。

## 5. 同盟の解体

アテーナイではデモティオンが同盟国であるコリントスを占領し、アテーナイの便宜に利用しようと提案し、民会が承認している<sup>256</sup>。しかし、アテーナイが行動に移る前に情報がコリントス側に漏れたのである。

コリントス人は領内の要衝に設置されていたアテーナイ人守備隊を手っ取り早く自国兵を交代させ、彼らをコリントスに集結させた。この時にカレスの艦隊がケンクレアイに到着したのである<sup>257</sup>。彼はコリントス側の処置を知り、自分はコリントスに対する陰謀が行なわれていると耳にしたので支援に来たのだ、と声明している。コリントス側は彼に感謝しながらも艦隊の入港を認めようとはせず、退去を命じた。コリントスに集められたアテーナイ兵も報酬を与えられて退去させられている。

スパルタとアルカディアの間の戦いは続いていた<sup>258</sup>。シケリアの僭主ディオニュシオス二世はティモクラテスの指揮下十二隻から成る艦隊をスパルタに派遣したのである<sup>259</sup>。ディオニュシオスからの援軍はスパルタ軍に協力してセッラシアを攻撃してこれを占領するのに成功している。アテーナイはアルカディアに騎兵部隊を提供する義務を負っていたが、同盟国のスパルタを対象とする戦闘には参加させなかったのである<sup>260</sup>。この後、ディオニュシオスの援軍はシケリアへ帰っている<sup>261</sup>。

コリントスは防衛のために歩兵と騎兵とから成る傭兵隊を雇い、防衛体制を整えると同時に、テーバイに和平の可能性を打診している<sup>262</sup>。テーバイは和平は可能であると答え、コリントスに使節を派遣するよう命じたのである<sup>263</sup>。それに対してコリントスはテーバイとの和平については同盟諸国と協議したいと許可を求めている<sup>264</sup>。テーバイはそれに対して許可を与えた。

コリントスはスパルタに使節を派遣し、自らの窮状を訴え、スパルタも和平に応じるよう提案を持ちかけ、もしスパルタが戦争の継続を望むのであればコリントスの単独講和を認めるよう求めたのである。スパルタは自らが和平に参加するのを拒否したが、コリントスの単独講和を認め、他の同盟諸国に対しても平和を欲するものには同盟からの脱退を認めた<sup>265</sup>。しかしスパルタはメッセニアを回復するまで戦争を継続すると宣言したのである。

コリントスやプレイウス、その他の同盟諸国（恐らくアカイアを除く）はテーバイに和

平を求める使節を派遣した。テーバイは同盟条約の締結を要求したが、コリントスは、同盟条約は平和をもたらさない、必要なのは平和条約であると返答してテーバイの要求を拒否したのである。テーバイはそれ以上無理強いをせず、これら諸国の主張を認め、平和条約を結んだのである。テーバイの同盟諸国もこれらの国々と平和条約を締結している<sup>266</sup>。

このようにして、前六世紀中頃に成立したペロポネソス同盟はスパルタのギリシア政策の基盤としておよそ二百年もの間大きな役割を演じた後、前三六六年夏に解体してしまった。そしてスパルタの支配も。

---

<sup>1</sup> C. J. Tuplin, *The Failing of Empire*, Stuttgart, 1993, 139-140.

<sup>3</sup> 141.

<sup>4</sup> 141.

<sup>5</sup> 142.

<sup>6</sup> 143.

<sup>7</sup> 144.

<sup>8</sup> 144-45.

<sup>9</sup> 145.

<sup>10</sup> 145-46.

<sup>11</sup> 146.

<sup>12</sup> J. Buckler, *The Theban Hegemony, 371-362 BC.*, Cambridge/ Massachusetts/ London, 70.

<sup>13</sup> 101-102.

<sup>14</sup> 186.

<sup>15</sup> 190.

<sup>16</sup> 200.

<sup>17</sup> 200.

<sup>18</sup> 201.

<sup>19</sup> シキュオンに関してはA. Griffin, *Sikyon*, Oxford, 1982, 67-68; メガラに関してはR. P. Legon, *Megara: The Political History of a Greek City-State to 336 B.C.*, Ithaca/ London, 1981, 275-278.

<sup>20</sup> P. Cartledge, *Agesilaos and the Crisis of Sparta*, Baltimore, 1987, 382.

<sup>21</sup> Cartledge, 388.

<sup>22</sup> J. B. Salmon, *Wealthy Corinth: A History of the City to 338 B.C.*, Oxford, 1984, 381.

<sup>23</sup> 377.

<sup>24</sup> 375.

<sup>25</sup> 379; 383-386.

<sup>26</sup> E. David, *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, Salem, 1986<sup>repr.</sup> 81-82. D. S. XV. 57. 3-58. cf. Isoc. *Philipp.* 52; Plut. *Mor.* 814b.

<sup>27</sup> アルカディアに関してはJ. Roy, "Arcadia and Boeotia in Peloponnesian Affairs, 370-362 B.C.", *Hist.* 20(1971), 569-599.

<sup>28</sup> Xen. *Hell.* 6. 4. 24.

<sup>29</sup> Xen. *Hell.* 6. 4. 25-26; D.S. 15. 56. 4.

<sup>30</sup> Xen. *Hell.* 6. 4. 16; Plut. *Ages.* 29.

<sup>31</sup> Xen. *Hell.* 6. 4. 18; cf. D.S. 15. 54. 6, 55. 1.

<sup>32</sup> Xen. *Hell.* 6. 4. 18.



- 
- 33 Xen. *Hell.* 6. 4. 19.
- 34 Xen. *Hell.* 6. 5. 1-3, D.S. 15. 30. 2, Aesch. 2. 70.
- 35 Xen. *Hell.* 6. 5. 1.
- 36 Xen. *Hell.* 6. 4. 27.
- 37 Xen. *Hell.* 6. 5. 2.
- 38 Xen. *Hell.* 6. 5. 3. エーリスが平和会議においてマルガネとスキッロス、トリピュリアを独立国と宣言することに反対したことの背景を C. J. Tuplin, *The Failings of Empire*, Hist. Einzel-schriften 76 (Stuttgart, 1993), 183-185. が考察している。
- 39 D.S. 15. 57. 1-2.
- 40 D.S. 15. 57. 1.
- 41 D.S. 15. 57. 1.
- 42 D.S. 15. 57. 2.
- 43 Xen. *Hell.* 6. 5. 3.
- 44 Xen. *Hell.* 6. 5. 4.
- 45 Xen. *Hell.* 6. 5. 4.
- 46 Xen. *Hell.* 6. 5. 5.
- 47 Xen. *Hell.* 6. 5. 5.
- 48 Xen. *Hell.* 6. 5. 6.
- 49 Xen. *Hell.* 6. 5. 7.
- 50 Xen. *Hell.* 6. 5. 7.
- 51 Xen. *Hell.* 6. 5. 8.
- 52 Xen. *Hell.* 6. 5. 7.
- 53 Xen. *Hell.* 6. 5. 8.
- 54 Xen. *Hell.* 6. 5. 9, D.S. 15. 59. 2.
- 55 Xen. *Hell.* 6. 5. 9.
- 56 Xen. *Hell.* 6. 5. 9.
- 57 Xen. *Hell.* 6. 5. 10, D.S. 15. 59. 2.
- 58 D.S. 15. 59. 3.
- 59 Xen. *Hell.* 6. 5. 10-11.
- 60 Xen. *Hell.* 6. 5. 12; Plut. *Ages.* 30. 5.
- 61 Xen. *Hell.* 6. 5. 13-14.
- 62 Xen. *Hell.* 6. 5. 11.
- 63 Xen. *Hell.* 6. 5. 17.
- 64 D.S. 15. 59. 4.
- 65 D.S. 15. 62. 1.
- 66 Xen. *Xell.* 6. 5. 15.
- 67 Xen. *Hell.* 6. 5. 16.
- 68 Xen. *Hell.* 6. 5. 21.
- 69 D.S. 15. 62. 3; Dem. 16. 12.
- 70 D.S. 15. 62. 3.
- 71 D.S. 15. 62. 3; Paus. 9. 14. 4: この頃、エパメイノンダスに率いられたボイオーティア軍はケレツソスに立て籠もっていたテスピアイ人を捕らえている。
- 72 Xen. *Hell.* 6. 5. 22.
- 73 Xen. *Hell.* 6. 5. 23; *Ages.* 2. 24; D.S. 15. 62. 4; cf. Paus. 9, 14, 4; Plut. *Ages.* 31; *Pelop.* 24 *et al.*
- 74 D.S. 15, 62, 5.
- 75 Xen. *Hell.* 6. 5. 23; cf. Plut. *Pelop.* 24. 1-2; D.S. 15. 62. 5.
- 76 Xen. *Hell.* 6. 5. 24.
- 77 Plut. *Pelop.* 24. 1.
- 78 Xen. *Hell.* 6. 5. 25.

- 
- 79 Plut. *Ages.* 31. 1; *Pelop.* 24. 2.  
80 Xen. *Hell.* 6. 5. 22-32; D.S. 15. 63. 4; cf. Plut. *Ages.* 31-32; *Pelop.* 24; Paus. 9. 14; Polyæn. 2. 1. 14-15, 27, 29; Nepos, *Ages.* 6; Aelian. *V. H.* 14. 27.  
81 Xen. *Hell.* 6. 5. 24-26; D.S. 15. 64. 2-5.  
82 Xen. *Hell.* 6. 5. 27; D.S. 15. 64. 1.  
83 Xen. *Hell.* 7. 2. 3.  
84 Xen. *Hell.* 6. 5. 28; D.S. 15. 65. 6.  
85 Xen. *Hell.* 6. 5. 29.  
86 D.S. 15. 59. 4, 62. 1.  
87 D.S. 15. 65. 6.  
88 D.S. 15. 59. 4, 62. 1.  
89 D.S. 15. 65. 6.  
90 Xen. *Hell.* 6. 5. 29, 7. 2. 2-3.  
91 D.S. 15. 65. 6.  
92 Xen. *Hell.* 6. 5. 27, 30; D.S. 15. 64. 6.  
93 Plut. *Ages.* 31.  
94 Plut. *Ages.* 32; Polyæn. 2. 1. 14; Aelian. *V. H.* 14. 27.  
95 Plut. *Ages.* 32.  
96 Xen. *Hell.* 6. 5. 30.  
97 Xen. *Hell.* 6. 5. 31; D.S. 15. 65. 2-5.  
98 Xen. *Hell.* 6. 5. 32; cf. D.S. 15. 65. 5; Polyæn. 2. 2. 5.  
99 Paus. 9. 14. 5, cf. 4. 26. 5; cf. D.S. 15. 66. 1; cf. Plut. *Ages.* 34. 1; cf. *Pelop.* 24. 5.  
100 D.S. 15. 66. 1.  
101 Paus. 4. 26. 5.  
102 Paus. 4. 27. 5-7.  
103 D.S. 15. 67. 1, プルタルコスは三ヶ月を要したという。Cf. Plut. *Ages.* 32. 8.  
104 D.S. 15. 63. 1, cf. Xen. *Hell.* 6. 5. 33.  
105 Xen. *Hell.* 6. 5. 35.  
106 Cf. Xen. *Hell.* 6. 5. 38-39.  
107 Dem. 16. 4.  
108 Dem. 59. 27.  
109 Xen. *Hell.* 6. 5. 49; D.S. 15. 63. 2.  
110 Xen. *Hell.* 6. 5. 50; Plut. *Ages.* 32. 8.  
111 Xen. *Hell.* 6. 5. 52; Plut. *Pelop.* 24. 5.  
112 Xen. *Hell.* 7. 1. 22, 26.  
113 Xen. *Hell.* 7. 1. 32; D.S. 15. 72. 3; Plut. *Ages.* 33.  
114 Xen. *Hell.* 7. 1. 1; D.S. 15. 67. 1.  
115 D.S. 15. 67. 1.  
116 Xen. *Hell.* 7. 1. 1.  
117 Cf. Dem. Or. 59. 26=Callisth. Fr. 12.  
118 Xen. *Hell.* 7. 1. 1.  
119 Xen. *Hell.* 7. 1. 2-11.  
120 Xen. *Hell.* 7. 1. 12-14.  
121 Xen. *Hell.* 7. 2. 4.  
122 D.S. 15. 67. 2.  
123 D.S. 15. 68. 1.  
124 D.S. 15. 68. 1.  
125 D.S. 15. 68. 1.  
126 D.S. 15. 57. 2 : 一万名に達したという。  
127 Xen. *Hell.* 7. 1. 15; D.S. 15. 68. 3 : ディオドロスはカブリアスが柵や濠によって防禦物

---

を構築したと言っているが信じがたい。

128 アルカディア軍とエーリス軍はXen. *Hell.* 7. 2. 5.で、アルゴス軍はXen. *Hell.* 7. 2. 8.で言及されている。

129 クセノポンは「裏切り者hoi prodidontes」と呼んでいる。

130 Xen. *Hell.* 7. 2. 6.

131 Xen. *Hell.* 7. 2. 7.

132 Xen. *Hell.* 7. 2. 8.

133 Xen. *Hell.* 7. 2. 9.

134 Xen. *Hell.* 7. 1. 15.

135 Xen. *Hell.* 7. 1. 16; D.S. 15. 68. 4 デイオドロスは強襲としているが誤りと思われる。

136 Xen. *Hell.* 7. 1. 17.

137 Cf. Paus. 9. 15. 4.

138 Paus. 6. 3. 2-3.

139 Paus. 9. 15. 4.

140 Polyæn. 5. 16. 4.

141 Xen. *Hell.* 7. 3. 2; D.S. 15. 69. 1.

142 Cf. Xen. *Hell.* 7. 2. 11.

143 Xen. *Hell.* 7. 1. 18; D.S. 15. 69. 1.

144 デイオドロスは誤ってプレイウスを離反国の中に入れてはいる。

145 D.S. 15. 69. 1.

146 D.S. 15. 69. 1; Xen. *Hell.* 7. 1. 18.

147 Xen. *Hell.* 7. 1. 19; D.S. 15. 69. 3-4.

148 Xen. *Hell.* 7. 1. 20; D.S. 15. 70. 1.

149 Xen. *Hell.* 7. 1. 20.

150 Xen. *Hell.* 7. 1. 20; D.S. 15. 70. 1.

151 Xen. *Hell.* 7. 1. 22.

152 Xen. *Hell.* 7. 1. 22; D.S. 15. 70. 1.

153 Xen. *Hell.* 7. 1. 23-24.

154 Xen. *Hell.* 7. 1. 24.

155 Xen. *Hell.* 7. 1. 25.

156 Paus. 8. 27. 3-4.

157 Paus. 8. 27. 2.

158 Paus. 8. 27. 5.

159 Paus. 8. 27. 2.

160 この件についてクセノポンは暗示的にしか述べていない。Cf. Xen. *Hell.* 7. 1. 25.

161 Xen. *Hell.* 7. 1. 26.

162 Xen. *Hell.* 7. 1. 22, 26.

163 Xen. *Hell.* 7. 1. 27. cf. D.S. 15. 70. 2.

164 年代はTod, n.133. ll.1-2:[Epi L]ysistratou archontos, epi t[e]s E[rech/theid]os dekates prytaneiasから明らかである。

165 Tod, n.133. ll.9-10.

166 Tod, n.133; D.S. 15. 70. 2.

167 D.S. 15. 72. 1-2; Plut. *Pelop.* 25; *Apop. Epam.* 23; Paus. 9. 14. 7; Nepos, 71. 5; Aelian. *V.H.* 13. 42.

168 Xen. *Hell.* 7. 1. 27 : メッセニアに関して。D.S. 15. 70. 2 : ボイオーティアに関して。

169 クセノポンは提供した傭兵の規模について言及していないが、デイオドロスは二千名と指摘している。

170 D.S. 15. 71. 2-72. 3; Plut. *Pelop.* 27ff; Paus. 9. 15. 1-2; Nepos, *Pelop.* 5.

171 Tod, n.134 : 碑文の年代は[E]pi Nausigenous archontos, epi tes Keker/[ropid]os protes

---

prytaneias (ll.6-7)という文言から明らかである。

172 D.S. 15. 73. 1-4.

173 Xen. *Hell.* 7. 1. 28.

174 Cf. D.S. 15. 71. 3; Plut. *Pelop.* 28.

175 Plut. *Ages.* 33.

176 Xen. *Hell.* 7. 1. 29.

177 Xen. *Hell.* 7. 1. 30.

178 Xen. *Hell.* 7. 1. 31.

179 Xen. *Hell.* 7. 1. 32; D.S. 15. 72. 3; Plut. *Ages.* 33.

180 Xen. *Hell.* 7. 2. 10.

181 Bengtson, *Staatsvertraege*, n.279.

182 D.S. 15. 74. 1.

183 Tod, n.135. ll.6-7. 使節団派遣の目的は不明。

184 Tod, n.135. Todが想定するようにコロイボスは親アテーナイ派の有力者で、アテーナイの使節団に協力的だったと思われる。

185 Tod, n.136.

186 Tod, n.136. ll.7-13.

187 Tod, n.136. ll.13-30.

188 Xen. *Hell.* 7. 1. 33; Plut. *Pelop.* 30. 1. cf. *Artax.* 22. 3.

189 Plut. *Artax.* 22. 3.

190 Xen. *Hell.* 7. 1. 41.

191 Cf. Xen. *Hell.* 7. 1. 43.

192 Xen. *Hell.* 7. 1. 42.

193 D.S. 15. 75. 2.

194 D.S. 15. 75. 2; Plut. *Pelop.* 29.

195 Xen. *Hell.* 7. 1. 33.

196 Xen. *Hell.* 7. 1. 33; Plut. *Pelop.* 30; *Artax.* 22; D.S. 15. 81. 3; Nepos, *Pelop.* 4. 3.

197 Tod, n.137.

198 Tod, n.137. ll.8-14.

199 Tod, n.137. ll.14-18.

200 Cf. Tod, n.132. cf. Bengtson, *Staatsvertraege*, n.279. cf. Xen. *Hell.* 7. 3. 1.

201 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.

202 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.

203 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.

204 Xen. *Hell.* 7. 1. 44.

205 Xen. *Hell.* 7. 1. 55.

206 D.S. 15. 70. 3; Xen. *Hell.* 7. 1. 46.

207 Plut. *Pelop.* 30; Xen. *Hell.* 7. 1. 35.

208 Xen. *Hell.* 7. 1. 34-35.

209 Xen. *Hell.* 7. 1. 35; Plut. *Pelop.* 30; *Artax.* 22; Dem. Or. 19. 137.

210 Plut. *Artax.* 22.

211 Xen. *Hell.* 7. 1. 36; Plut. *Pelop.* 30.

212 Xen. *Hell.* 7. 1. 36. cf. 38. Plut. *Pelop.* 30.

213 Xen. *Hell.* 7. 1. 38; Plut. *Pelop.* 30. 6-7; *Artax.* 22. 6; Dem. Or. 19. 137.

214 Xen. *Hell.* 7. 1. 38.

215 Xen. *Hell.* 7. 1. 40.

216 Xen. *Hell.* 7. 1. 41; D.S. 15. 72. 3.

217 Xen. *Hell.* 7. 2. 1.

218 Xen. *Hell.* 7. 4. 11.

219 Xen. *Hell.* 7. 2. 1, 20.

- 
- 220 Xen. *Hell.* 7. 2. 18-19.  
221 Xen. *Hell.* 7. 2. 17.  
222 Xen. *Hell.* 7. 2. 1, 17.  
223 Xen. *Hell.* 7. 2. 11.  
224 クセノポンはシキュオン人部隊hoi Sikyonioiと傭兵部隊hoi misthophoroiを区別している。  
225 Xen. *Hell.* 7. 2. 11-12.  
226 Xen. *Hell.* 7. 2. 13.  
227 Xen. *Hell.* 7. 2. 14.  
228 Xen. *Hell.* 7. 2. 15.  
229 Xen. *Hell.* 7. 2. 16.  
230 Xen. *Hell.* 7. 2. 18.  
231 Xen. *Hell.* 7. 2. 19; D.S. 15. 75. 3.  
232 Xen. *Hell.* 7. 2. 20 : トゥミアの要塞は構築中であった。  
233 これはコリントスとプレイウスの交通線開鑿を目的としていると思われる。  
234 Xen. *Hell.* 7. 2. 21-22.  
235 Xen. *Hell.* 7. 2. 23.  
236 Xen. *Hell.* 7. 3. 1.  
237 Xen. *Hell.* 7. 3. 2.  
238 Xen. *Hell.* 7. 3. 4.  
239 Xen. *Hell.* 7. 3. 9.  
240 Xen. *Hell.* 7. 3. 4  
241 Xen. *Hell.* 7. 4. 1; D.S. 15. 76. 1; Dem. Or. 18. 99; Aesch. Or. 3. 35.  
242 Xen. *Hell.* 7. 4. 2.  
243 彼はアテーナイへの接近の機会を窺っていた。彼の狙いはテーバイとアテーナイの対立を利用してテーバイの影響から独立すること、それにスパルタに対するアテーナイの支援を抑制することであったと考えられる。  
244 Xen. *Hell.* 7. 4. 3.  
245 Nepos, *Epam.* 6. 1-3; Plut. *Apoph. Epam.* 15.  
246 Xen. *Hell.* 7. 3. 4.  
247 Xen. *Hell.* 7. 3. 5.  
248 Xen. *Hell.* 7. 3. 6.  
249 Xen. *Hell.* 7. 3. 7.  
250 Xen. *Hell.* 7. 3. 8.  
251 Xen. *Hell.* 7. 3. 9.  
252 Xen. *Hell.* 7. 3. 10.  
253 Xen. *Hell.* 7. 3. 11.  
254 Xen. *Hell.* 7. 3. 12.  
255 Xen. *Hell.* 7. 4. 1.  
256 Xen. *Hell.* 7. 4. 4.  
257 Xen. *Hell.* 7. 4. 5.  
258 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.  
259 Xen. *Hell.* 7. 4. 12.  
260 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.  
261 Xen. *Hell.* 7. 4. 12.  
262 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.  
263 Xen. *Hell.* 7. 4. 7.  
264 Xen. *Hell.* 7. 4. 8.  
265 Xen. *Hell.* 7. 4. 9.  
266 Xen. *Hell.* 7. 4. 11 : クセノポンはアルゴスの名前しか挙げていないが、シキュオンやア

---

ルカディアなどもこれらの諸国との講和に名を連ねていたであろうと考えられる。